令和元年 7 月 20 日
北関東フォーラム
於：シムックス

中斎塾　北関東フォーラム
平成 31 年度 第 7 回

初心忘るべからず

本日は紹介書籍が沢山ありますので、先に回覧致します。本日のテーマは「初心忘る可からず」です。能の『風姿花伝』の中に「時事の初心忘るべからず」とあります。自分が生きていく上で、その時々に初心がある。それを忘れないようにしましょうということです。

何かに一所懸命になっていると、何も情報が入って来ないで、周りの状況に全く氣がつかないことがあります。そして、はっと氣がつくと大変なことになっていたりする。一心不乱に仕事をしている時でも、時々ふっと顔を上げて周囲を見る心持ち・余裕が要ります。つまり、その時々の初心を思い出す必要があります。例えば、仕事に就いた時の初心、或いは仕事が順調にいって儲かって仕方がない時は、＜はて、私はこんなに儲かっていいのだろうか？＞と、ふっと顔を上げる。身体の調子がおかしいけれども、もうちょっと頑張ろうと無理をする。そういう時は、＜私の身体は大丈夫かな？＞ と身体の曲がり角の初心を思い出す。そういう癖をつければよいのです。

ということで、今日の紹介書籍は、私が時々自分の初心を思い出す時にきっかけにする本を選びました。自分で、＜どうかな？＞ と思った時に、フッと顔を上げる。その時に役に立つ本です。

○『古代文明を訪ねて―アンコール遺跡』　深澤賢治著（平成 13 年）

10 代の時、外国に行きたいと強烈に思い、20 歳で東南アジアへ一人旅に出かけました。その時にバカチョンカメラで撮った写真を元に、写真展を開きました。この本は、その時の写真と感じたことを文章にしてまとめたものですが、見るたびに若かったなと思います。

当時は、ベトナム戦争が始まる半年前ですからゲリラ戦をやっていて、カンボジアからタイ国境の橋を歩いて渡った時に兵隊に囲まれて捕まってしまいました。無事に釈放されましたが、その時の緊迫感を思い出します。また、帰国した時には、日本には国家の方針がない、何と情けない国かと感じました。その思いがシムックスの理念のもとになりました。

○『ＨＯＰＰＯ　ＲＹＯＤＯ　100 Ｑ＆Ａ』　木村汎監修　人間の科学社（昭和 60 年）

これは私が初めて出版社から出した本です。

若い頃、日本青年会議所で北方領土問題委員会に所属していた時、メンバーで実際に北方領土に行って返還要求を伝えました。当時、北方領土に関する本は難しいものばかりで、もっと分かりやすいものを作ろうと思ったのがきっかけで、メンバーが中心となって作業をすすめ、北方領土問題で最高権威である北大の木村汎先生に謝礼なしで監修をして戴きました。若い人にも受け入れられるように、マンガは無料で専門家に頼みました。他に色々な人が手伝ってくれましたが、全部ボランティアで手伝って貰いました。

この本を出版するにあたっては、日本ＪＣから、今年は本を出版しないと言われてしまいましたので、まず外堀から埋めました。政府関係、官庁の推薦文を貰い、民間団体では地婦連や同盟の推薦を貰いました。それから日本ＪＣの会頭と交渉してＯＫを戴きました。出来上がった本は、全国の私の所属する委員会にメンバーを出している青年会議所に強制的に割り当てて、無理やり買って貰いました。

ですからこの本は、人様から推薦文を戴くコツを覚えた本であり、出版社との交渉を覚えた本であり、本の売り方を覚えた本であり･･･出版の原点となった本だと思っています。

ちなみにその御縁で、毎年 2 月 7 日に開かれる北方領土返還要求全国大会には招待状が届きますので、出席しています。この大会には必ず内閣総理大臣が出席しているので、私は総理大臣の警備の様子をずっと見続けています。私が見始めたのは中曽根総理大臣の時でしたが、殺されてもいいという位の手抜きのセキュリティでした。細川総理の時にはセキュリティが大分強化されましたが、今は手抜きのセキュリティに戻っています。

○『警備保障のすべて』　深澤賢治著　東洋経済新報社（昭和 61 年）

私が警備業をベースに仕事を始めようと思った時の原点の本です。

警備会社は警察庁が監督官庁です。当時、警察庁に知り合いが一人もいませんでしたから、「利根警備保障株式会社　代表取締役」の肩書きで警察庁に行っても門前払いです。そこで「警備業研究家」という名刺を自分で作って、監督官庁に名刺をばら撒きに行っては、議論を吹っかけて来ました。そうしているうちに知り合いが少しづつ出来て、仲良くなりました。東洋経済から書いて貰えないか打診がありましたので、『警備保障のすべて』を書きました。

この本は警備業の入門書として結構売れたので、すぐに第二版、その後、第三版を出版社から依頼され出しました。ただし、この本は専門書ですから、専門書を出す時には相当

の文献に当たらないといけないということを身を持って体験しました。

○『木内信胤語録』　三人会記録・編集（平成６年）

木内信胤先生は私の人生で初めて師匠と言った方であり、ただ一人の師匠です。木内信胤先生が群馬県で講演するから話を聞いてみなさい、と私の叔父から勧められて出かけて行ったのが先生との出会いです。それ以前に木内先生の本を読んでいて、ずいぶん態度の大きい人だという印象を持っていましたが、実際に話をお聞きして、本物だ！ と思いました。先生の講演が終わって、直ぐにふらふらと前に出て行って「弟子にして下さい」とお願いしました。木内信胤先生の息子さんが、中斎塾フォーラムの顧問になって戴いている木内孝さんです。

佐藤一斎は、「太上は天を師とし、其の次は人を師とし、其の次は経を師とす」と言いました。即ち、第一等の人生は自然を師匠に出来ること。そして、素晴らしい人物を師匠に出来れば第二等の人生、素晴らしい書物に出会えたなら第三等の人生が送れる、というわけです。私が出会った素晴らしい書物は渋澤栄一の『論語講義』であり、人生の師は木内信胤先生です。先生の前に立つと、私は自然と直立不動になっていました。

木内先生が亡くなられた時に、先生の語録を書こうと思いました。私は木内先生の話を速記のようにすべてを書き取りましたから、それがダンボール二箱くらい残っていました。猪瀬前理事長と成川さんという方と一緒に、三人会という名前で出しました。ですからこの本は、人生の師匠に巡り合い、私が誰にも頼まれず、自分で書きたいと思って書いた本です。

○『渋澤論語を読む』　深澤賢治著　明徳出版社（平成８年）

先ほど申しました、私が出会った素晴らしい書物が渋澤栄一の『論語講義』です。『論語講義』を、良い本だからと周りの人に勧めたのですが、皆、難しくて読めないと言うのです。仕方がないので、分かりやすく書こうと思ったのが出版のきっかけです。

本を書く時には、出典を明らかにしなければいけないとか、人の名前を出す時には本人に了解をとらなければいけません。それが最低限のルールです。この本には色々な人の名前が出てきますから、その人たち全員に原稿を送って了解を戴くのにな思いをした記憶があります。

ですからこの本は、本人に確認をとらなければならないこと、その後で周りで裏をとる必要がある、ということを勉強した本です。

○『夢・25 年　シムックス』　創立 25 周年記念誌編集委員会（平成 12 年）

会社を創って 25 年経った時に作った記念誌です。

28 歳でシムックスを創って 25 年、この頃は身体がボロボロになったという自覚がありました。自分でやれやれ一区切りしたと思うと、スピードが衰えますね。社員が 2000 人を超し、自分で限界を感じて、次の人間を作らなければならないと感じた頃です。お尻に火が点いてから 5 年後、会社を創り、30 年経って社長をバトンタッチしました。

○『ロータリーと論語』　太田南ロータリークラブ（平成 18 年）

ロータリークラブの会長時代に、毎回、論語の話をしました。講話の記録を残そうと思って形にしたものです。

○『陽明学のすすめⅠ　経営講話「抜本塞源論」』　深澤賢治著　明徳出版社（平成 17 年）

陽明学を 10 冊シリーズで出そうと決めた最初の本です。

「陽明学のすすめ」というタイトルは、二松学舎の元理事長で明徳出版社の社主であった小林日出夫さんが付けてくれました。折角タイトルをつけて戴いたので、1 冊で終わりにするのはもったいないので、このタイトルで 10 冊書こうと決めて、現在 7 冊まで書きました。

そして参考資料として 2 冊ご紹介します。

『兵隊と食べ物』　深澤良男著（昭和 60 年発行）と『おやじのおきみやげ』　深澤良男著（平成 4 年発行）です。『兵隊と食べ物』は父が遺した記録をまとめたものです。父親は一言も自分が戦争に行った時の話をしませんでしたが、本に書き残してくれたので、どのような兵隊生活を送ったかが分かりました。

色々な記録を書いておくと、後々役に立つものですね。『おやじのおきみやげ』には、私が東南アジアに行った時の記録も書き残してありました。アルバイト代だけでは足りないから、親戚の叔父から幾ら、兄の給料から幾ら、母親のへそくりを幾ら持って行った･･･ふてぇ野郎だ！　と書いてありました。

では、恒例の質問に参ります。ここ 1 ヶ月位でお考え下さい。

○　このところ、嘘をついていない方

○　このところ、良い日が続いていると思う方

○　このところ、有難うと言い、有難うと言われることが多い方

○　このところ、健康法を真面目にやっている方

○　このところ、自分磨きをよくやっている方

○　昨晩寝る時に、明日以降のことを過去形でイメージして眠った方

随分増えました。嬉しいことですね。やはり、発表して戴く時間をとった方がよさそうです。

巧言令色、鮮きかな仁

論語を読む時は、現代に置き換える、自分自身に置き換えてみましょう。本日は陽貨篇16～18 です。

【十六】子 曰く、 古 は民に三疾あり。今や 或 は是れ之亡し。

孔子が言うには、昔は民には三つの病があった。今はもうなくなった。

古 の 狂 や肆、今の 狂 や蕩。

「狂」は、狂信者（思い込みの激しい人）です。今風に言えばオタクですね。悪い意味では、オウム真理教も狂信者です。しかし言い方を変えれば、志は凄く高いわけです。

昔の狂（狂信者）は、思った事を思った通りに直言するけれども、法律や常識は守っていた。しかし今の狂は我儘で自分勝手、常識や法律も氣にしない。

現代に置き換えて考えると、先日の京都アニメーション放火の犯人は、まさに「蕩」です。33 名もの方が亡くなりました。動気は分かりませんが、自分の書いたものをパクられたことに対して、報復手段として放火したと言いたいわけです。大やけどを負った犯人が生き延びれば、こういう言い方をするのではないでしょうか。「私はただ、ガソリンをまいて火を点けただけです。憂さを晴らそうとしただけで、人を殺そうと思ったわけではない」と。

古 の 矜 や廉、今の 矜 や忿戻。

「衿」は、自分を厳しく律する人。

昔の衿は、節度があった。しかし今の衿は、自分の思い通りでなければ怒り狂って人と争うので、周りにとんでもない災いをふりまくものだ。

古 の愚や 直 、今の愚や詐のみ。

昔の愚（愚か者）は正直で、相手のことを氣にかけずに思ったことをすぐに口に出して

いた。今の愚は、人を騙すから困ったものだ。

【十七】子 曰く、巧言令 色 、 鮮 きかな仁。

「巧言」は口先が上手、「令色」はお化粧が上手な人です。
口先が上手で表情が豊か。そういう人に本物の人物は少ないものだ。

「巧言令色、鮮きかな仁」という言葉を覚えておいて、時々ふっと思い出して、今日、私は嘘をついたかな？　言い過ぎたかな？　リップサービスの部分もちょっとあったかな？・・・と振り返ってみる。この論語を自分自身の反省材料としてお使いいただく。それがだんだん馴染んで来たら、周りを見渡してみるとよろしいでしょう。
今、参院選の真っ只中ですから、政治家で見てみます。
安倍さんがあちこちで演説をしていますが、実に巧言ですね。ただ、野次が返って来た時に、一々応酬するようでは、まだ仁（人物）ではありません。
令色はどうでしょうか？　今、選挙で愛想を振りまいていますから、これも当たっています。安倍さんが初めて総理大臣になった時は、顔色も良くて表情も良い、お坊ちゃまがそのまま総理大臣になったような善人面をして出て来ました。それが、第一次の総理を辞める時には悪人面になっていました。二度目の今は、善人面と悪人面がほどよく混ざっていて、その時の状況に応じて表情が変わります。
もう一人、枝野さんはどうでしょうか？　自民党の古参の政治家が枝野さんを評して、「頭も切れるし、専門的な知識もある。寝業師の能力も持つ。将来が実に楽しみな政治家だ」と言っていました。今、大分頭角を現しました。
やはり「巧言令色」までは、政治家として上に上がっていく時の必須条件なのかなと思います。我々が政治家を判断するには、口先が上手で表情も豊か、ついつい引き込まれるような話をする人達は仁か、それとも否か・・・という眼で、言っている内容をみる。そして、言ったこととやったことが一致しているかどうかも、ずっと見ていくと必要があります。
ということで、「巧言令色、鮮きかな仁」は、自分自身を振り返る。そして周りを見る。その時の大きな判断基準であるとお考え下さい。
しかし、これはなかなか難しいですね。本当に良いことをしようと思って実行している人でも、やっていることが違っていると困ります。やはり、「仁」を目指している、その一点で判断すべきだろうと感じます。

【十八】 子 曰く、 紫 の朱を奪うことを悪む。鄭声の雅楽を乱ることを悪む。利口の邦家を 覆 す者を悪む。

孔子の時代は、赤などの原色を正色とし、紫など混合色は間色として値打ちが下でした。

孔子が言うには、紫が正しい綺麗な朱色を濁らせてしまうのは困ったものだ。鄭の淫らな音楽が正調な雅楽を乱すのはよくない。口先だけの小利口者が偉大な国家を転覆させることがなぜ分からないのか。

正しいものと不正なものが混ざり合うと、だいたい不正の方が優勢になってしまう。正しいものが全部不正を追い落とすことはまずない、と孔子は嘆いています。意訳をすると、私（孔子）は世の中を良くしようと考え、実行するだけの能力を持っているにもかかわらず、世の中の不正な色に染まった者たちが私の力を発揮することを拒んでいる、困ったものだねえ・・・となります。

これを安倍さんで考えると、＜日本の国の憲法は日本人が作った憲法ではない。自分たちの国は自分たちの手で作った憲法で行くのが妥当である＞という私の正しい主張を、なぜ世間は分かってくれないのだろう・・・と読めますね。

利口の邦家を覆す者

「利口の邦家を覆す者を悪む」という部分は、そのまま日韓関係に置き換えられます。時事評論に繋げて申します。

・**「こじれる日韓、悪化の一途」**（7/19　日経新聞）・・・「元徴用工訴訟を巡り、韓国外務省は日本政府が要請していた仲裁委員会の設置に応じない方針を示した。日本政府による事実上の対抗措置とみられる半導体材料の輸出規制強化では、韓国が世界貿易機関（ＷＴＯ）での議論を提起した。戦後最悪となった日韓関係が長期化しそうである」とあります。

韓国外務省報道官は、「日本が一方的に設定した日程で、私達が縛られる必要はない」と言っています。日本政府は、韓国はさんざん知らぬ存ぜぬを繰り返していてこの科白はないだろう･･･ということでしょうが、ＷＴＯのような国際的な場で議論する場合には、知らない人は韓国の言う通りだと思ってしまいます。なぜ日本はきちんと議論をしないのだろう、だから世界に迷惑をかけるような輸出規制をするのだ、という理解になってしまいます。

韓国は、自分の主張を尤もらしく言い換えることに慣れている。当に「利口の邦家を覆す者」で、一見、なるほどなと思うような科白を言うわけです。

もう一つ別の記事、

・韓国、利下げに転換（7/19　日経新聞）・・・米中貿易戦争や日本の輸出規制で韓国の景氣が減速をしたから、危機感を持って利下げをしたという記事です。

韓国は、アメリカと中国だけで輸出の 4 割を占めています。そして、輸出の 3 割を占める半導体を、日本が輸出規制をして出せないようにしてしまったわけです。アメリカと中国に輸出している最大品物に日本が待ったをかけたから、韓国は悲鳴をあげて、なりふり構わず議論を求めているわけですが、今まで日本が幾ら議論を求めても韓国が知らんぷりをしていたのだから・・・と、先日のＧ20 での安倍首相の大人げない態度となったのでしょう。

私に言わせれば、どちらも阿呆ですね。国が違うのですから。どちらも小利口がやっていると呆れます。

ということで、論語には、新聞を読む時のヒントがあると思って見ればよろしいでしょう。論語を見て、現代に置き換え、自分自身に置き換える。すると、これから世の中はどうなる･･･自分はどうする･･･と考えていく順番が出来てきます。

・リブラ規制、Ｇ７「早急に」（7/18　日経新聞夕刊）・・・フェイスブックが計画する新しい通貨「リブラ」ですが、下手をするとリブラが既存の通貨にとって代ると各国が氣にしています。今や、新しい通貨がどんどん生まれているわけです。日本でも、今度の渋澤栄一（新札）が最後になるだろうという話が公然と言われています。

ですから私もスマホ決裁が出来るようにしようと思っています。世の中の流れを見ると、近い将来、スマホ決裁が出来ないとタクシーやお店の支払等々で弾かれてしまう事になりかねません。ですからもう少し慣れておかなければいけないと強烈に感じています。

私が「今の通貨の仕組みはなくなる」と言い出して７、8 年経っています。やっと世の中の実態が追い付いてきたと感じています。

・欧州勢 ＨＶで日本猛追（7/15　日経新聞）・・・車もどんどん時代が変わるので見ていて面白いですね。今朝のテレビで、アクセルと強く踏み込むとブレーキがかかる装置を開発した 79 歳の社長が紹介されていました。その社長さんの本業は全く違うけれども、70

歳の時にそういう装置を作ろうと一念発起して、9年かけてやっと出来上がったということです。

専門家ほど専門バカになるから怖いですよ。時代の流れに取り残されます。車にしても地上を走るだけが車ではないわけで、アニメや映画では空を飛ぶ車があります。そして、現実に空を飛ぶ車が出来ています。しかし、空飛ぶ車を走らせようとしても、日本の場合は規制が多くて、日本は後回しになっています。

将来は、水・陸・空を当たり前に走る車が溢れるのではないでしょうか。勿論、ガソリンを使わない車が当たり前になるでしょうし、空気からエネルギーを取りだすのも当たり前になるでしょう。手塚治虫の書いた漫画に色々なヒントがあるような氣が致します。

今月、私は北海道に行っておりました。川北温泉の露天風呂温泉に入ったのですが、「ここは熊の生息地です。氣をつけてお入りください」という看板が立っていました。「熊、出没注意」ではないのです。熊が住んでいる所に露天風呂を作らせてもらったという感じでした。そこには、学生時代からの友人に連れて行って貰ったのですが、彼の家に行くと大きな鹿の角が飾ってありました。中標津に移り住んで、初めて仕留めた鹿の角だそうです。震えながら引きがねを引いて、仕留めた時の鹿の顔が今でも眼に焼き付いているということでした。ですからそれが彼の初心なのです。彼が言うには、今では当たり前に鹿を撃って皮を剥いで肉にして食べることがなっているが、初心を忘れず、次の事を考えるためにも最初に仕留めた鹿のことを思い出すのだそうです。

皆さんも今後生きていく上で、時事の初心で〝これは忘れてはいけない〟〝今後のために活かさなければいけない〟というものがあったなら、時々ふっと顔を上げて思い出す癖をつけると良いと思います。無意識の習慣化ということです。

最後に、私が北海道の友人を訪れた理由について少しお話します。

これから日本はおかしくなります。特にオリンピック直後は景氣がおかしくなります。東京フォーラムでもお話したのですが、オリンピックが開催されるかどうかは前日まで五分と五分だと思っています。第三次世界大戦が始まれば開催できませんし、3.11のような災害が起きても、9.11のようなテロが起きても出来ませんね。

そうすると個人個人の身の守り方としては、前から申し上げていますが、疎開先を見つけておく必要があります。ただ、人間関係を再構築していないと、いざという時に受けてくれません。そこで、先月は新潟、今月は北海道の友人の所に相互支援協定を結びに行きました。次は九州に行く予定です。

また、有事の際は、食糧が手に入らなくなります。ロシアでハイパーインフレが起きて食糧が買えなくなった時、モスクワ市民の中で行政から土地を分けて貰っていた人達は、じゃが芋を作って行き延びることが出来たわけです。ですから食べ物を作るための土地と、実際に野菜を作るノウハウを身に付けておくとよろしいでしょう。

また、お金が使えなくなりますから、金（ゴールド）や貴金属を食べ物に交換するようになると思いますので、そのつもりで若干持っておられると良いと思います。

更に、株式ですが、日本の国が潰れる、或いは潰れた時でも生き残る会社の株を手にしておくことも有効でしょう。

お時間が参りました。今日のテーマ「初心忘るべからず」は、時事（その時その時）の初心を忘れないということです。時々ふっと顔を上げて、初心を思い出す癖をつけて下さい。以上で本日の講話を終了致します。有難うございました。